

経済民生常任委員会記録

平成30年11月12日(月)午前9時59分～午前11時04分(9階904会議室)

○出席委員(9名)

委員長	石原洋三郎	副委員長	誉田 憲孝
委員	佐々木 優	委員	後藤 善次
委員	斎藤 正臣	委員	黒沢 仁
委員	佐久間行夫	委員	山岸 清
委員	渡辺 敏彦		

○欠席委員(なし)

○市長等部局出席者(なし)

○議 題

「地域密着型プロスポーツチームとの連携による地域の活性化に関する調査」

- (1) 行政視察について
- (2) その他

午前9時59分 開 議

(石原洋三郎委員長) ただいまから経済民生常任委員会を開会いたします。

議題は、お手元に配付の印刷物のとおりです。

地域密着型プロスポーツチームとの連携による地域の活性化に関する調査を議題といたします。

初めに、行政視察についてを議題といたします。

先週の11月6日から8日にかけて、当委員会では行政視察を実施してまいりました。視察の際の意見や感想などについては、委員の皆様それぞれまとめシートをもとに作成し、本日お持ちいただいていることと思いますが、今回は各委員の皆様より、そのまとめシートに基づき、行政視察における意見開陳をお願いしたいと思います。

なお、各委員の皆様がお持ちのまとめシートについては、委員会終了後、回収させていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしく申し上げます。

なお、ここで、松本市の視察における追加での確認事項を2点ほど申し上げさせていただきたいと思っております。ちょうど佐々木委員が広報に関するご質問と、あと後藤委員が各担当部署との連携がどうなのかというご質問があったかと思うのですが、その後ちょっと引き続き正副手元で確認いたしまし

た。

まず、広報支援に関してなのですが、クラブチームの広報支援は全てそれぞれの商店会や町内会が独自に行っているということで答えがあったのですが、後日改めて正副手元で確認いたしましたところ、クラブが有名でなかったころは市が前面に出て広報活動もバックアップしていたとのことでありました。現在は、市民のチームを応援する機運が高まり、自主的にそれぞれの地区で行うようになったとのことでありました。

また、各担当部署とクラブとの協働事業は、それぞれの担当課で直接クラブと連絡を取り合い実施しており、ホームタウン推進の担当課が間に入っていないとの説明だったのですが、後日改めて正副手元で確認いたしましたところ、クラブが有名でなかったころは、市としても全ての部署でクラブを積極的に活用するため、庁議のような場で必ず各部署で連携事業を行うよう全庁的に確認し、取り組んでいたとのことでありました。現在は、そういった考えが市全体に浸透したため、各部署に任せているという状態とのことでありました。

松本市でも初めから市民が自主的にクラブに対して支援を行っていたわけでもなく、また市としても全庁的にクラブと協働することを確認しながら取り組みを進めてきたことで、現在のさまざまな事業につながっているということで、初めからそれぞれの部署の判断で独自にクラブの活用を行ってきたわけではなくて、司令塔みたいなものが当初は存在していたということでありました。

それでは、早速であります、順番に意見開陳をお願いしたいと思います。

(渡辺敏彦委員) いただいた資料のとおり書いておきました。いただいた資料のとおり書いてきたのですが、これは地域活性化についてでありますから、サッカー場がどうのこうのというのも当然あるのですが、まず川崎では、多分これ経済効果の比較していないよという話があったのですが、ここら辺やっぱりある程度しておかないとしようがないのかなというような思いをしました。あと、ここはこんなものか。学校がどうのこうのというのも教育委員会所管になってしまうから。

あと、町田については、地域貢献活動、前もそうなのだけれども、地域貢献活動を積極的にすることによって地域が元気になるというふうに思います。福島の場合は、バックについているのが全農ついたりなんかしているのだけれども、リンゴとりやただのモモとりやっただの出てくるのだけれども、余り中心市街地の活性化とか町なかのにぎわいに対する活動が積極的にやっているようなイメージがまだ頭に入ってきていないので、J3とはいえども、チームの売り込みをする、ユニホーム着ながらまちの中でいろんな活動すれば、認知されながら、まちの中も元気になってくるのかなというような思いはしました。あと、これも町田で聞いたのだけれども、そういった活動については全てボランティアでやっているよというようなことで、シーズンオフが中心になるかというふうに思います、そういった活動を積極的にやることによって、町なかに元気が出てくるのかなと。

松本市では、パブリックビューイングだっけ、あれ福島でも流していると、ちょっとイメージ変わるのかなという気はしました。あと、地域活性化という部分からしますと、地域活性化という部分で

は、スポーツ振興とか何かになってくると、また所管違うと思っているから、記載はしていたのだよ、答えを伺っているから。だけれども、余りぴんとこない部分があったものですから、それを無理無理地域の活性化につながるような調査をしなくてはならなかったし、これからそういう提言をしなくてはならないという部分についてお話を申し上げました。

(石原洋三郎委員長) あと、では書いてあるところを見て、書記のほうでまとめさせて……。

(渡辺敏彦委員) これ具体的には書いてこなかったものだから、今適当におしゃべりをさせていただきました。

(山岸 清委員) 川崎フロンターレが、私ら行ったおかげで刺激を受けて、負けたながらも優勝したということは良いことで。やっぱり強くなければだめだね。やっぱり野球でもサッカーでも、ラグビーだって学法福島、聖光に負けてしまって、俺あれ聖光負けてくれればいいのになと思っていたのだよな。とにかく強くなければだめだ、スポーツは。アマチュアにしろプロにしろ。やっぱり、今回のやつと関係ないことを言うのだけれども、広島なんかずっとテールエンドだったのだから、セリーグの。それが今3連覇だよ。でも、やっぱり日本シリーズは経験不足で、あっちのソフトバンクにやられたけれども。

【「経済力だよ」と呼ぶ者あり】

(山岸 清委員) 経済力なのだよ、やっぱり。金なのだ。だから、やっぱり30万都市でプロスポーツを応援していくというのはなかなか大変なところはあると思う。というのは、これにも書いておいたけれども、川崎フロンターレもチームの後援会長が市長で、後援会に市から補助金が出されていることは、ちょっと私も問題を持ったし、松本市においては裁判にまでなっているのだよね。最高裁で棄却になったから、いいようなものだけれども。やっぱり市民の理解というかな、応援しようという感覚が出てこない。だから、やっぱり強くなければだめなのだよ。秋田の金足農業なんて、金なくて、募集したらいきなり今度は準優勝で、あれ遠征費とか本当にかかるのだよ。それをやったらもうすごく集まってしまったでしょう。福商だってそうだよ。福商、甲子園に行って、うんと集まるのだよ、寄附。そうすると、それ余ったやつ、ほかの運動部に回すのだから。だから、やっぱり強くなければだめなのだ。それとあと、弱くても市民が応援するという体制ね。要するに広島だってあんな最初のころ、ようやくやっていて、みんな入場料のほかに、たる募金なんていって、たるを置いて、そこに金を入れてもらって、何とかだったのだ。でも、あれドラフトで衣笠とか山本浩二なんかとったから、広島も強くなったけれども、やっぱり選手で、そして強くないと、応援するほうだって力入らないぞ。行くたんび負けていたのでは。やっぱりホームでは何でかんで勝つのだというくらいの。俺、だからこの間の行って見ましたよ。2点とられたとき、ああ、これだめだと思ったな。大体が。守備の選手が走力ないのだよ。1対1になってしまっているのだ。ペれんってやられてしまう。あっ、これだめだと思ったよ。そして、帰ってくるとき、わあっなんてなって、あれ1点返したなと思った。でも、結果だめだな。やっぱり勝たなければだめなのだ、勝負事だから。

【「結果が全て」と呼ぶ者あり】

(山岸 清委員) 結果が全てだ。それで、赤いシャツ着てまち歩いてたって、何だ、あれ、どこの人かで終わりだよ。やっぱり金足の吉田なんてそこら通ってみな。もうそれこそ、ああ、吉田君なんて行ってやるのだ。

以上。あと、これ書いてきたから、委員長。終わり。

(黒沢 仁委員) 俺もそれなりに書いてきたのだ。ただ、ぼつぼつという書き方だったものだから。

まず、川崎市については、今ほども申し上げた出資金あるいは後援会の補助金の支出というようなことで、金銭的なバックアップをしているというようなことで、やっぱりこういった部分は、これ慎重な対応が望まれるのではないかなというような思い。あと、市長がみずから前面に応援しているというようなことで、応援サポーターの確保について、これ市がどのようにかかわっていくかという部分が福島市も求められるのかなというような部分と、行政との連携事業の実施により、市民とのかかわりを強めているというようなことで、福島市としても地域資源としての活用策を今後積極的に検討していく必要があると。そして、川崎フロンターレ連携・魅力づくり事業実行委員会というようなことで、市民、各団体から選出された委員で構成、スポーツを通してのまちへの愛着と誇り、連帯感を醸成しているというようなことで、これにはサポーターも参加しているというようなことで、福島市もこういった取り組みが今後求められるのかなんていうような部分です。

町田市につきましては、町田市スポーツ推進条例というようなことで、スポーツに関する施策を総合的かつ計画的に推進し、市民の健康づくり、あるいはホームタウンチームとの連携の後押しにこれがなっているというようなお話がなされました。福島市でも推進条例の策定に向けて検討もなされてもよいのかなと。あと、行政のかかわりとして、市の支援というようなことに関しましては、この十分な効果を市民に十分示しながら理解を求めているというようなことで、スポーツに関する市民の意識調査の実施、あるいはボランティアの育成なんかもこれから福島市として求められていくのかなというような思いです。それから、ふるさと納税の寄附を活用しての出前事業の実施というようなことでの支援策もあったというようなことで、この辺は特筆すべきなのかなというような思いでございます。

次に、松本市については、松本市スポーツ推進計画というようなことで、地域に根づいたスポーツの振興を図っていくのだというようなことで、スポーツ推進の体系として、部局の横断的な連携を図っているというような部分で、これも福島市に求められる部分なのかなと。そして、ホームタウンの考え方ですね。これ佐久間さんが質問されていたとおりで、松本山雅の場合は県内のほかの市町村、いわゆる4市1町2村でホームタウンを形成しているというようなことで、福島市のホームタウンも、福島……違う。ユナイテッドも、会津若松だっけ、会津若松と福島市というようなことなのですから、やっぱり県北一円というようなことで、中核市としての福島市のモチベーションのあり方なんかも検討されていくことが必要ではないかというようなことでございます。それから、地域交流活動、

あるいは行政による松本山雅を活用した協働事業の実施というようなことで、認知を高めるための自助努力、そしてそれを支える自治体としてのチームへの委託事業などを展開しているというような部分で、これも福島市が今後検討されていく内容なのかなと。あとは、ライセンスの取得ですよ。結局J3で終わるか、J2を目指してJ2になるのか、そういうようなことで、これ特にグラウンドは県の所有というようなことで、ライセンス取得とか何かの場合に関しても、ホームタウンとして福島市が県のほうに強く要望していくことも必要なのかなというような部分と、あとアンダークラブの育成といった部分。ただ、資金力を必要とするというようなことで、なかなか困難なのかなというものでございます。総じて、あとまとめた分も真面目にこれほど書いてきたのですが、読みませんので。

以上です。

(佐久間行夫委員) まず、川崎市で聴取した内容の中で、ポイントとキーワードということの中では、川崎フロンターレ、プロチームとしては、まずみずからが強くなることと地域貢献をすることというのは明確に意思表示が見えましたし、市民に定着したのは地道に地域活動に取り組んできた結果。また、クラブの定着化には市と密に連携してアピールしていくことが一番よい方法であるということでありました。

2点目は、福島市のスポーツタウン推進にあたっての課題について、アドバイスのこと、あれ書いてあったのだよね。あれはすごいなと思ったのね。やっぱり自分たちがきちんと今までやってきたという自負があるのかなと思ったのね。その内容が、せっかくだから、記録に残しておかないと忘れてしまうので、記録してきましたけれども、クラブの認知度向上と行政の魅力向上を達成するためには、お互いに連携することが不可欠と考えます。クラブは行政の広告媒体等を利用して市民への周知、浸透を図り、行政は事業で連携することにより、行政とクラブとの密接なつながりをアピールすることでクラブを通じた魅力発信が可能となります。また、行政の広告媒体に選手やマスコットを掲載するなど、露出を高めていくことが必要ではないかと思われます。また、クラブとして行政のイベントに積極的に協力して、市民に対して存在感をアピールしていくことが大切ではないかと思えますということで、全くそのとおりなのかな。福島市でもいろんなイベントやっているのだけれども、全くユニテッド、この前も学習センターとか何か、どこにもユニテッドとか、連携が全然ないので、さすがにやっぱり大したものだなと思いました。マネジメントとしても立派だなと思まして、そういった福島に対してのアドバイスをきちんと受けとめなくてはいけないなと思いました。

あと、目立ったポイントとキーワードとしては、川崎フロンターレとの連携の中では、株式会社川崎フロンターレに出資金100万円、また川崎フロンターレの後援会に2,000万円と、市長が後援会長で、議長が副会長と。市の幹部も必ず観戦に行くように、そういう仕組みがあると。また、子供たちを、サッカー教室などを開催して、底辺からちゃんと、きちんと強化をしている。また、フロンターレと行政、後援会の定例会が週1回開催されるなんていうのも、これもすごいことだなと思いました。

あとまた、川崎フロンターレ連携・魅力づくり事業実行委員会が年に4回開催されていて、いろん

な事業が行われていて、市制記念試合には市民の1,000組2,000名を無料で招待したり、子供たちには、これは有名な算数ドリルとか、そういったものの事業を行っているということでありました。

また、等々力の競技場では改築費に80億円、年間が3億2,000万円の維持費で、芝の維持費が3,800万円と言っていましたね。収入が1億1,300万円で、フロンターレの売上金の5%もその中に含まれていると。川崎市の直営で正規職員10名のほか、必要に応じて委託等や嘱託職員を採用するということがありまして、競技場の施設は4時間で2万6,000円、使用料であるということでありました。

それを聴取した内容をポイントにして、福島市の取り組みと比較しての感想、意見としては、やっぱり川崎フロンターレと行政、議会、商工団体など、多くの団体との連携がきちんと行われているということがまず1点目。

2つ目は、川崎フロンターレ、川崎フロンターレ後援会に対して、税金の支援があると。これは、よしあしは関係なく、そういうふう感じた。随分多いなと思いました。

それと、3点目は、先ほど言いましたように、福島市の課題に対してきちんとしたアドバイスをしているので、それをやっぱり真摯に受けとめて、福島市ももっと、さっき言ったみたいに、福島市、ユナイテッドで我々の福島市をPRしてもらおう分もあるし、我々行政がやっぱりユナイテッドをもっと露出度を高めてやらなくてはいけないということが3点目です。

4点目は、個人的な気持ちで、感想なのですが、やっぱりJ1、2連覇する川崎フロンターレは素晴らしい選手だなと。この前の柏レイソルとの戦いだって、さすがだなと思ったね。やっぱりああいう選手がやるというのは、官民一体になって一生懸命頑張っていらっしゃるのだなというふうに感じました。これがまず川崎市でした。

次に、町田市です。町田市のポイント、キーワードとしては、町田ゼルビアの躍進、2012年にリーグ加盟したのですね。福島市のユナイテッドとほぼ同じ時期になったのに、2015年J3、2位になって、2016年にはJ2、7位と、そして2018年はシーズン、今11月10日、一番近いので4位なのだからね。松本山雅が何か2位だか1位だかね。大体あの辺、上で戦っているのだね。ゼルビアと山雅は。そういう状況の中であると。

地域交流活動等、行政と町田ゼルビアとの協働事業としては、出前サッカー、サッカーコーチが保育所、幼稚園、学童保育施設、小学校など、あんなちっちゃいときからやっぱり行くのだね。年間67こまもやっていると。これは素晴らしいことだなと。

あと、経済波及効果としては、2011年にJ2に昇格した時点の経済効果が14億円で、2017年、J1に昇格したときに50億円と。やっぱりこれは市民に、応援するために、どんな経済効果があるのかというのも我々、そのとおりのかわからないけれども、やっぱりある程度調べて、説得するためには、こういった波及効果の試算も必要なかなと思いました。

その次が市民の認知度、FC町田ゼルビアは91.3%、すごいね。100%市民は、町田の市民はゼルビアのことを知っているなんていうところあるのかなと思うぐらいすごいなと思いました。しかし、一

方で、平均観客数は4,000人と、これ少ないと。お話を伺ったら、会場へのアクセスとか、ネット配信ダゾーンとかの影響で少し減っているのかなというふうな感じで受けとめました。

それと、ホームゲームを支えるボランティア、これも大切だなと思いました。2013年に国体開催時に設立したまちだサポーターズというボランティア団体が今に至っていて、運営補助を行っているということがキーポイント、キーワードでした。

それに対して、福島市の取り組みと比較の感想、意見としては、やっぱり町田ゼルビアの躍進の陰には、少年サッカーのまちと言われるように競技人口の拡大や競技力向上にふだんから取り組んでいると。やっぱりユースチームとか、そういったものをきちんと育てていって、その花として地元のプロスポーツが伸びていくのだなという感じはしていますよね。

あと、2点目はやっぱり町田ゼルビアを市民の認知度91%に上げることをどうやってみんなでできるかということで、これは川崎でも同じだけれども、やっぱりもう少し行政は頑張って地元のプロスポーツをいろんな媒体に少しでも、顔でもマスコットでも、載せることが必要ではないかと思いました。

次に、松本市。松本市は、ポイントとキーワードとしては、やはり総合計画の中で健康寿命延伸都市・松本というふうな総合計画の中で体系づけていると。その下にスポーツ振興計画の基本理念がありまして、するスポーツ、見るスポーツ、支えるスポーツというのがあって、そういったものの体系がきちんとしているな。応援するにしても、その体系、支援するためのものになる条例とか、支援する規則とか、いろんなもの、基本理念とか、そういうものがきちんとしていないとだめなのだなど。福島は、ちょっとそういう面ではお粗末かなというふうに感じました。

そのほか、プロスポーツの振興事業としては、松本山雅FCをはじめ、地元プロスポーツの支援、活用により、都市イメージ、交流活力、健康づくり、経済振興、スポーツ振興、人材育成などの向上を図り、人、情報の交流拠点都市の形成を進めるということで、そういう振興事業の中にもちゃんとそういうふうに着目されて、これはなぜそういうふうになったかということ、日韓ワールドカップでパラグアイ代表がキャンプに来たことからきっかけに、昭和40年の国体の長野県選抜の山雅サッカークラブがJリーグに参入を目指したということでありまして、サッカー場の使用の優先だとか、そのほかに松本市がかりがねサッカー場を建設したと、約13億8,000万円ぐらいだったのですが、サッカーのために、山雅のためにつくったということでありましたし、またホームタウン4市1町2村が出資、資金面でも支援をしていると。松本が2,000万円のほか、塩尻市とか安曇野市とかありますけれども、そういったことで、やっぱりもう少し広い範囲で、いろんな方が、いろんなまちが応援しているなというのを感じました。パブリックビューイングもすてきだなと思ったので、6回で480万円なら、アウェイのときに誰でも来れるような町なかでパブリックビューイングしたら、よりユナイテッドも理解できるのかなと感じました。

次に、松本山雅FCの活用としては、松本山雅フェスティバルということで、全国から42チームも

参加して、やっぱりサッカーの拡大、そういう競技力とか、いろんな意味で一生懸命取り組んでいるなと思いました。また、いろんな意味で山雅さんが地域活性化や健康増進やスポーツ振興や青少年健全育成に本当に一生懸命地道に活動しているなというふうに感じてきました。

最後に、松本山雅FCの経済波及効果としては、J2になったときが約24億2,000万円で、J1のときに54億5,000万円だから、ほかのまちと同じぐらいで、J2だと二、三十億円、J1になると五、六十億円の経済効果があるのだなというふうに、ほかのJリーグチームと同じような経済効果が出ています。

そういったポイント、キーワードをもとに、福島市の取り組みと比較しての感想、意見を申し上げますと、総合計画でのプロスポーツ振興、ホームタウンの役割をきちんとやっぱり明確に体系づけるべきではないか。

2点目は、中学校、高校生のユースチームの拡大、技術力、競技力向上発展のための仕組みづくりがやっぱり福島でももう少し必要なのかなというふうに感じました。

3つ目は、皆さんからも、そうだなと言ってくれたのが、ホームタウンに加盟する自治体をふやして、サポーターの増強、さらには資金面にもつながるので、そういったことを、行政がやるのがいいのか、ユナイテッドさん、プロチームがやるのがいいのかだけれども、そういうふうに魅力づくりをしてほしいなということです。

以上であります。ちょっと短かったけれども。

(後藤善次委員) 佐久間さんに全く同じです。申し上げます。

川崎市、協働事業について、有名になっていけばいくほど連携を密にしないと、相手が忙しくなってくる。

定着した要因について、市民に愛されるための、強くなることも必要ですけれども、その地域、地域に愛される要因ってあるのかなと思いました。

それから、町内会、商店街との連携について、あれだけ住宅街に密接したところに会場がありますと、移動するお客さんが経済効果に結びついてくるということですがけれども、福島は公共交通を利用して行くことはちょっとなかなか難しいのかなと、立地条件から。そうなってくると、車で移動することになりますから、そうした場合の経済効果というのは、これまた、今回見た3カ所とはまた違ってくるのかなというふうに感じました。

それから、町田市、ホームタウンとしての取り組みについては、駅とか競技場はさることながら、さまざまところでチームをアピールする装飾を行っている広報活動が目につきました。市民への周知方法について、我が市も工夫が必要であろうと。

ホームタウンと行政の協働事業について、これ佐久間さんからもお話ありましたがけれども、出前サッカーチーム、これ、やるところもそうですけれども、67こまというのはすばらしい、訪問先の検討と行っている数について、とても好感が持てました。

それから、経済効果については、先ほど佐久間さんからありましたとおり、試算を直接することはなかなか難しいかもしれませんが、アピールする一つの材料として必要であろうと。

それから、認知度については91.3%。やっぱりスポーツって余り好きではない人ってたくさんいるのではないかと思うのです。この91.3%というのはどういう数字なのかなと思ったぐらい、この91.3%に押し上げるための苦労は大変だったであろうと思いました。

それから、松本市、これはスポーツ推進計画の位置づけについて、これも担当の方が、それがいいのか悪いのかよくわからない、私たちはつくるときにはいみじくもしたからみたいな、結構さめた形でいましたけれども、明らかにあの方たちが動く上で、この推進計画というのは全部後押しされている、あるいは根拠づけになっている、あと堂々とやっていくことができるということの一つの明確にした、すばらしいものなのかなと思いました。これは、サッカー以外のそのほかのスポーツにもこれはどんどん、どんどん続いていくことである。あるいは、競技場に資金を投入するためにも、この推進計画があるということは大事なことなのかなと思いました。

行政との協働事業について、これは少年サッカー大会が開催されて、強豪チームを呼んで、対戦する機会をつくっているということが、これは本当にプロスポーツとして大事なことなのかなというふうに感じました。

それから、地域の活性化について、サポーターによる松本市の宣伝マン効果というのをお話しされていました。要するにホームグラウンドでやることも必要ですけども、対戦相手のチームのほうに出かけて行って、そこで松本市をアピールしてくるといふ宣伝マン効果というのは、これは見習うべきであろうなというふうに感じました。

以上でございます。

(佐々木優委員) 川崎市については、皆さんからも出ましたけれども、例えば小学校の体験教室なんかは、サッカーだけではなくて、体を動かす、スポーツに触れる楽しさを伝えるというところに、広く市民にプロスポーツチームのよさを知らせるといふポイントがあるなというのを感じました。子供たちにも広げていく、それから商店街の皆さんともちゃんと連携をしていくという、やっぱり知名度を上げていくにはそういう努力が必要だし、それに川崎市はとにかくすごいバックアップを全体としてしていて、強いというのも相まって、相乗効果があるのだなということを感じました。

後援会が4万3,000人、今一番最新の情報だということですけども、147万5,000人の人口の中だと、大体2.9%ぐらいなのかなと。福島市で考えると8,500人ぐらいなのかなということで、全体的な規模が大きいので、今福島市での、ユナイテッド福島がどういう状況にあるのか、ちょっと私もまだ確認をしていないので、そのサポーターの状況とか、そこら辺もこれからどうやって伸ばしていくことができるのかということは検討していかなければいけないなと思います。

感想としては、やっぱり体験教室なんかは、本当に小さいころからスポーツになれ親しむというのはやっぱり大事だなと思いますし、福島なんかはやっぱり肥満の子が多くなっているとかと、そうい

う現状もあるので、運動するのが苦手な子もいるかもしれないけれども、やっぱりプロスポーツ選手が来たらすごくテンションも気持ちも上がると思うし、憧れて、自分もあんなりたいなとかと、そういう気持ちにもつながったりするかなと思うので、ユナイテッドも小学校なんかでそういう機会があったらいいのかなというふうに感じました。

町田については、スポーツ推進条例というのがやっぱりプロスポーツチーム、ホームタウンチームの役割をちゃんと明らかにしているのだなと、この根拠があるから、市が応援するということになるのだなというのはすごくわかりやすく、川崎と違って、町田はすごく、とにかく広報でやっていくというところで線引きをしているのだなというのがわかりました。その理由としては、やっぱりサッカーというところの一部に資金を投入する、税金を投入するということに反対の意見があるというのは、これも全くそのとおりだと思いますし、やっぱり市民の皆さんにこういうスポーツをもっともっと広げていきたいのですという条件がある中でやっていくということが大事だなというのがわかりました。

町田でも出前のサッカー教室とか、子供たちに触れ合うということを大事にしているというのは、やっぱりこれもいいなというふうに思います。

経済効果がJ2で14億円、J1で50億円ということだったのですけれども、自治体として税収このぐらい、ここでこのぐらい上がったのという何か実感というか、そういうのってないのかなとか、これって民間会社の試算だと思うのですけれども、50億円上がったら結構響いてくるのではないかなとかとも思うのですけれども、直接のそういう影響がなかなかわかりづらいというのはどうしてかなというちょっと疑問が出ました。

あとは、まちだサポーターズというボランティア団体もすごく存在感があるなと。福島ユナイテッドFCではボランティア体制なんかどうなっているのかなとか、福島市自体のボランティア体制全体の構造ってどうなっているのかなと、ちょっとここも確認してみたいなというふうに思いました。

松本市については、ここもスポーツ推進計画と施策ということで明確にしているなというのがあって、これをもとにいろんなことに携わっていくことが行政としてできるのだなというふうには感じました。これも基本としては健康づくりとか、あと地域振興という、そういう基本のスタンスをちゃんと掲げていくということが市民に、一企業にだけ優遇するというわけではないということちゃんと明確にしていかなければ、やっぱり裁判が起こされたりとかという、そういうことも当然あり得ることなので、やっぱり市民全体にとってどうなのかというのをきちんと打ち出していかななくてはならないなというふうに思います。

20人に1人の市民がサポーターというのはすごいなと思って、松本市でいったら1万2,200人ぐらいなのかなということで、これも、やっぱりどうやってチームをPRしていくのかと、強いというのもありますけれども、やっぱり地域と一緒にいろいろな取り組んでいくことで、身近な存在になっていくというのはやっぱり大事だなということがわかりました。

3つの自治体を通して、やっぱり身近な存在であるとか、出向いていくということがやっぱり大事なのではないかなというのは共通してわかりました。

以上です。

(斎藤正臣委員) まず、川崎市なのですけれども、皆さんおっしゃっていたように、市長がフロンターレの後援会会長でありながら、その後援会へ市補助金2,000万円が投入されているというのは、この部分だけ切り取ったら、それはどう考えてもやっぱりおかしい。ただ、過去においてプロスポーツがさんざん流出してしまったという過去があって、そういった、失敗といえば失敗だと思うのですけれども、そういったものを繰り返さないようにしようと、そういった流れの中で、議会であったりとか、もちろん市民もおおむね納得した上でそういったふうになっているというようなご説明を聞いたときに、一番首長以下行政の方たちと市民の人たち、もちろんそのプロスポーツの決意をやっぱり感じる、覚悟、もう絶対それで成功するのだという覚悟を感じた。福島市と比較をしたときに、では一体福島に今それがあるのかということ、本当にJ2を目指すのですかという、あるいは違う目標であったりとかというものを設定して、行政、プロスポーツ一丸となって、民間も一丸となって、そういった目指す方向性というのができ上がっているのかということ、それが今曖昧であったり、私はないと思っているのですけれども、やっぱりそこが一番盛り上がらない要因ではないのかなというような気がしていて、それが今回の3市を共通して一番強く印象に残ったところなのです。それがやっぱり必要なのかな。本当にJ2目指すのだったらみんなでJ2目指しましょうというふうに言えるような体制づくりが必要なのかなと川崎市に関しては思いました。

次、町田市なのですけれども、経済効果に関して、議会に対して説明するのが大変なのですよというお話で、この先、福島市にだってあり得る話だと思うのです。さっきの話、J2を目指すというのであれば、やっぱり施設整備が必要。では、一体それは、その経済効果、J2に上がったときの十何億円という経済効果というものを担保に、その市の財政から捻出していくのだというような説明になるのかもしれないのですけれども、では一体その経済効果って本当に根拠ってあるのですかねというところは、その経済効果という言葉ぐらい怪しいものはないかと私は個人的には思っているので、その部分は福島市もぶつかっていく壁なのではないのかなと思います。しっかりと分析できるのであれば、そういった手法も研究していかなければいけないのかなというふうに思いますし、逆にお金ではないのだよというところ、経済効果ではなくて、こういったふうに市民の人たちがスポーツを通して健康になっていくのだよとか、そういったところを目指してもいいと思いますし、その辺はちょっと考えなければいけないのかなと思いました。

最後、松本市なのですけれども、初めの盛り上がるきっかけというのは、行政支援というのは余り関係なかったのだよというような話だったと思うのです。ただ、その盛り上がりから行政がそこに追従して、いろんな取り組みをして、市民にいい効果を、いい効果が上がっているのかなという、そういう効果が上がる取り組みがされているというようなことだったと思います。行政支援、その盛り上げ

ていく段階のときの行政支援というのは、やっぱり施設整備であったりとか広報というものに注力されるものなのかなと、やっぱりこう思いました。

これも3市を共通してなのですけれども、個人的にはやっぱり印象に残ったのは……何でしたっけ。屋外で何か放送していましたよね。何でしたっけ。

(石原洋三郎委員長) パブリックビューイングでしたっけ。

(斎藤正臣委員) パブリックビューイング、そうそう。パブリックビューイング、あれは福島駅前広場とかツイン広場でやったら何かおもしろそうだなと思いましたし、そういうのは民間とかでできればいいのかな。松本市においては、行政が商工会議所に丸投げしていたみたいなのですけれども、別に民間でもできそうな感じだし、そういうものはやってもいいのかなと思いましたし。あとは、やっぱり強いチームにはメインスポンサーがついているというところですよ。地域産業の強さとプロスポーツの強さというのは、何か比例しているような感じがありましたし、そんなことを言ってもしようがないのですけれども。やっぱりそういったところがユナイテッド福島さんにもう少しあると、より推進できるのではないのかなというふうに思ったところです。

以上です。

(菅田憲孝委員) まず、川崎からですかね。よく出てきたキーワードとかいうのは、やはりとにかく知っていただくということで、皆さんからも出ていましたけれども、知っていただくためにどういう活動をしていくかということで、向こうの方は小さなイベントでもよいので、とにかくやっていくということ、そしてスポーツにとどまらないで連携をしていく大切さということを教えていただいたように認識しています。

そして、行政、クラブ、後援会の毎週1回の打ち合わせがあるということですが、フロントレの上役が来て、その場である程度決められるようにということで、そういう方が来ているというのは、それなりの規模のチームだからとか、まちだからという部分もあるとは思いますが、そういった密な連携というのはやはり必要なのかなというふうに思っております。

あとは、ちょっと質問した海外とのかかわりという部分では、やはりPR効果等々出ているということだったので、やはりこの辺の魅力もあるのかなというふうに思います。

あとは、算数ドリルですとか、フォトコンテストですとか、その地域にいる方、応援する方がちょっとした優越感を持てるというか、ちょっとお得感を味わえるような、そういった雰囲気があるのではないかなということで、応援しがいもあるのだろうなというふうに思います。

そして、サッカー教室に関してですが、とにかくほかのところ、やっているなという中で、ユナイテッドFCもちょっと考えてみると、県の親子ふれあいサッカー教室なんていうので、県主催で10回ぐらいやっていたりですとか、あと市内でも幼稚園、保育所、あと小学校4年生までということで、無料で4回までやってくれていて、それ以上はお金がかかる。おそらく回数、こま数ですと、ほかのチームに負けていない、今回視察に行ったところに負けていないような数はやっているのですが、

ただ目的とかどうなのとか、地域、特定のところばかりがやっているのですとか、そういった格差とかというのはやっぱりあるのかなというふうに思いますので、その辺ももうちょっと市で連携をして、絡めながらやっていくというのは非常に大事なのかなというふうに思ったところです。

あと、やはり市長、議長なんかは公務の都合がつく限り応援に行くということで、説明の方も、ホームゲームのあるたびに出欠を確認しているということで、しっかり行政も押しているというのがあるのかなということです。

あとは、クラブ自身で強くなればよいではなくて、いかに応援するのかというのが大事だと思いますという話が非常に印象的であります。

町田市でありますけれども、先ほどから出ている91%の認知度というのは確かにどういうものなのかなと私も思ったのですけれども、その認知度の上昇と観客数の上昇が一致しないのだということで悩んでいるのだようなことを言うておりましたけれども、やはり単なる宣伝とかPRだけというのでは余り効果がなくて、それがサッカーを盛り上げるとか、サポーターを盛り上げることにはつながらなくて、地道な連携、活動というのがないと観客数というのはふえていかないのだろうなというふうに思うところであります。

あとは、サッカーの競技場のお話なんかのときに、Jリーグなんかとの意思疎通がうまくとれていなかったということで、J2になってからはもう綿密にきちっと危機感を持ってやっていますということでしたけれども、その辺の連携というのも大切なのだなということでもあります。

松本市ですけれども、市長さんが生きがいの仕組みづくり、あとは健康寿命延伸都市なんていうことで、サッカーチームの山雅もその一つであるということで、そもそも市で目指しているまちづくり、地域づくりというのがそのサッカーチームを応援する、あるいはサッカー競技に取り組むというのにやはり連結しているのかなという、その土台があるのだろうなというふうに思っています。スポーツ施設も76施設ということですから、その整備等は大変だということでもありましたけれども、その辺というのは土台がある程度、そもそもいいところでもあるのかなというふうに思いました。

そして、皆さんランチタイムのときに、私、済みません。佐久間委員に後から、何だよ、誘ってくれよと怒られたのですけれども、喫茶山雅にちょっと行ってきたら、やはりグッズ売っていたりとか、パブリックビューイングスペースが2階にあったりとか、あとは選手のサイン、あとはユニホーム飾ってあったり、売店があったり、選手も食べているようなだったかな、多分そう、選手も食べていると、その食堂で。そういった部分があったりとか、サポーターが来たらそこで楽しめるし、サポーターではない方が来てもやはりサッカーの楽しさというのを何となく味わえる場所があったのではないかなというふうに思っています。そこの喫茶店の同好会からチームが始まって、たたき上げでいっているという部分からすると、当然地域の人が密着できてくる要因の一つになっていたのは間違いないよなというふうに思っております。

あとは、松本市はじめ7市町村がホームタウンということでもありますけれども、やはり連携、情報

の共有、そしてサポーターを幅広く広げていく上でも連携というのが必要になってくるのかなというふうに思っております。

あと最後には、やはり山岸委員も言っているように、強くないとだめなのだということなのですが、やはり選手も、選手たちが来たくくなるようなまちですとか、元気なまちですとか、あとはサポーターの体制、そういったものがしっかりしていけば、もしかしたらそこに光が差すこともあるのかなと期待を持てる研修でした。

以上でございます。

(石原洋三郎委員長) それでは、あと最後、私のほうなのですが、川崎市なのですけれども、感想、意見を申し上げます。

チームが地域や子供と積極的に密着しようとしている姿勢が見えました。また、行政とチームが毎週1回打ち合わせをしていることも印象的でした。行政が、広報も含めて、後援会として後押ししていることが印象的でした。川崎フロンターレといえば川崎市だということに努力している姿勢が見えました。川崎市も、小学生や子供にフロンターレを浸透させようとしている姿勢が強く見えました。行政の担当セクションも、市民スポーツ室が担当しておりまして、スポーツ文化あるいはスポーツ振興の担当セクションが担当していることが印象的でした。

次に、町田市です。行政は、市民に対して、その効果を詳しく丁寧に説明をしようとしていました。町田市とチームとは出資をしておらず、一線を画していましたが、スタジアムを建設するということは印象的でした。また、スポーツ推進条例を制定して、ホームタウンチームを後押ししているのが印象的でした。チームが地域や小学生に無償で密着しようとしている姿勢を強く感じました。行政もチームとの打ち合わせを月1回定例化しているのも印象的でした。スポーツ振興課が担当部署で、スポーツ文化の普及推進をする部署がチームを担当しているのが印象的でした。

松本市に移りますと、周辺市町村とホームタウンとして連携をしているのが印象的でした。行政も、スタジアム、県の施設ですけれども、そういった改修においてほかの市町村とも連携していたということが印象的でした。チームのほうは、懐を広げて、地域に密着しようとしていました。安曇野市、塩尻市、山形村とも連絡をとり合いながら、ホームタウン会議というのをチーム、山雅が開いているというのが印象的でした。チームのほうで積極的に小中学校、幼稚園、保育所を巡回している、それを行政が支援しているということが印象的でした。綿密な打ち合わせをその都度、市とチームは週二、三回行っているということが印象的でした。運営会社の社長は、もともとJ C、青年会議所の理事長だったということでありましたが、そのころから地域に根づこうとしていたということが印象的でありました。

以上であります。

行政視察の総括をさせていただきますと、なかなか絞り込むというのも難しいかと思うのですが、皆様のご意見を、3点ほどまとめさせていただきますと、どのクラブも初めから今ほど強かったと

いうわけでもなく、市民から認知、応援されていたわけではないということではないかと思います。川崎市も松本市も、初めから現在のようなよい状況ではなく、行政との協働による地道な地域貢献活動が実を結んでいるとの話でありました。行政は、地域に密着したいというクラブを支援するため、常日頃から綿密な連絡をとり合って、広報による支援とともに、全庁的なクラブの活用を図り、子供の夢を育むこと、地域のアイデンティティーの醸成、健康増進、町なかのにぎわい、地域コミュニティーの活性化、市の名前を全国にPRする効果など、さまざまな効果を得ていました。また、それによってチームは市民への露出をふやすことで認知度が上がり、地域に溶け込むことが実現していました。そのような地道な活動により、お互いよりよい相乗効果を生み出し、チームが魅力的な地域資源へと成長していると実感できました。特に松本市では、有名な選手であった松田直樹選手や反町監督は、チームが強いから、お金があるから、松本に来たわけではなく、松本市の熱気に感銘を受けて、そこに魅力を感じて来ていただいたとの話もありました。やはりチームを応援する機運の醸成やチームが市民に認められるということはチームの強化につながる重要な要素であり、視察先のこれらの取り組みや考え方は本市でも優先して取り組むべき非常に参考になるものであったと思います。当然市民の理解が必要となってまいりますので、行政は市民への説明責任を果たさなくてはなりませんし、スポーツ振興条例などのスポーツ振興計画や、あるいは経済波及効果がどうか、青少年健全育成という観点からのスポーツ推進とか、そういった目標を定めていくことが行政にとって重要ではないかと思われまます。

次に、チームの運営を支えるボランティア団体の重要性ということでもあります。町田市では、まちだサポーターズというボランティア団体がゼルビアの試合運営を支えており、なくてはならない存在との話でありました。今後、東京オリンピック開催により高まったボランティア機運をうまく利用し、まちだサポーターズの組織強化を図りたいとの説明もあり、今後東京オリンピックのソフトボールの試合が行われる本市においても、ソフトボール競技運営を支える地元ボランティアの、大会終了後の受け皿の一つとして、福島ユナイテッドの存在が重要になってくると思います。

3点目、ホームタウン自治体を広げることの重要性であります。松本市では、松本市を含む4市1町2村がホームタウン自治体として情報交換や連携事業を実施しているとのことでありました。松本市が中心となり他市町村を牽引しているという印象ではありませんでした。松本市に先行して中核市となり、連携中枢都市としてリーダーシップを発揮することが期待される本市においては、改めて本市周辺自治体を巻き込み、一緒になってホームタウン推進に取り組むことが必要であると感じたところであります。

そのほか、皆様からのご意見、あるいはまとめシートを参考にしながら、またまとめていきたいと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

そのほか、今回の視察について、皆様から何かございますでしょうか。

(渡辺敏彦委員) 今経済効果の話あったのだけれども、ユナイテッドFCができて、J3になって、

どのぐらいの経済効果があったかなんていうのもわからないよね。だから、J3、今例えばいろいろ調べて、J3でこのぐらいの効果があるよ、1,600人集まるのだよ、J2になったらどうなのだ、J1になったらどうなのだというような、ある程度の経済効果みたいなものを、鉛筆3回ぐらいなめたっていいから、数字出してくれれば、市民も、あるいは協力し得る事業所とか、団体とかがもうちょっと乗ってくるのでないかなというような思いはあるのね。だから、それ行政ですべきかどうかわからないのだけれども、そういうような効果の算出等についてもやっていかななくてはならないのかなというふうに思った。あと、さっき言ったけれども、全農とか東邦銀行とかいろいろ出しているのだけれども、そういったことをすることによって、さっきの話で、こういう効果があるのだよ。もっともっと大きな企業とか何かあると思うのね。それをみっちりやっばり、個人的な考えとしては、経済団体とか企業、そういった方々が積極的に、いわき市あたりそうなのだろうけれども、あれ、もともと大きいところだけれども、しっかりやって、それに見合った行政支援をしていかななくてはならないのかなと思っているの。駅伝とか、あと野球なんて、福島市の職員なり市民が出ているのは、福島市の名誉のためにああやって本気になって頑張っているのね。ユナイテッドFC、福島市の名誉のためにという感覚ではないと思うのだよ、多分。そうすると何なのだといったら、例えばJ1になったらどうい、何でJ1になって強くなると、地域よくなるのだということはずっと考えていくと、やっばり民間の方々が一生懸命頑張って、見合った行政の支援をしてもら。支援をした分は、いろんな部分で、ボランティアとか何かの中で協力もいただく。そういうような流れなのかなと思っているのね。だから、いろいろ行政として何をしなくてはならないかについては、今話あった中である程度まとめてほしいな。J3、J2、J1ではどういう効果あるのかと、わくわく、期待を持たせるような何かやったほうがいいのでないかなとは思うね。うそでもいいのだ。100億円、J1になったら100億円効果あるぞと言ったら、ああ、そうなのかいと、大きいなというふうになる。100億円はちょっと大きいか。30億円よりないか。これ山岸さんみたいになってしまうのだ。

(佐久間行夫委員) 前に観光コンベンションでデータでどの程度、試算はしてもらっていて、基本的に経営規模という考え方で、その波及効果も類推するというところで、J1は大体浦和で60億円、大宮でJ2で30億円、さっき言った長野で、J3で6億円で、現状分析の中で福島ユナイテッドFCの経営規模約3億円だから、その程度ではないかという説明は前に受けていたのだよ。

(渡辺敏彦委員) J2になったらば。

(佐久間行夫委員) J2になると30億円くらいまで。

(渡辺敏彦委員) 福島。

(佐久間行夫委員) 福島はまだまだ、その半分だよ。

(渡辺敏彦委員) 福島の話。

(佐久間行夫委員) それはわからないね。10億円ではない。10億円。というような説明は前に受けていたよ。資料ちゃんとあるから。でも、はっきりどうなのかというと、その10億円とか20億円が直接

現金としてどうなのかというのは、その辺が難しいところで、はっきりしないところが本当ではないかな。

(石原洋三郎委員長) ほかがございますでしょうか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(石原洋三郎委員長) それでは、委員会終了後にまとめシートを回収したいと思いますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

本日いただいたご意見をもとに、次回の委員会でご改めて行政視察のまとめを行いたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

次に、次回以降の委員会の日程について、日程の調整を行いたいと思ひますが、今回は日にちが少しあいてしまひますが、12月定例会議中に開催したいと思ひますけれども、ご都合いかがでしょうか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

(石原洋三郎委員長) 12月3日からの間で、あれですか。基本的には委員会のある13、14日。

(山岸 清委員) 13日がいいです。

(後藤善次委員) 13日はちょっと。できれば早く終わりたい。

(石原洋三郎委員長) では、14日のほうがよろしいですか。

(後藤善次委員) 私は、14日のほうが助かる。

(佐久間行夫委員) 委員会だものね。余り委員会は長引かないでしょう。余り議案ないだろうから、12月は。

(石原洋三郎委員長) ただ、後藤さんは13ではないほうがいいということですか。

(山岸 清委員) では、14日でもいいよ。

(後藤善次委員) 13は議運もあるし。

(石原洋三郎委員長) では、第1候補、14ということで、あと第2候補、13ということで、よろしくお願ひしたいと思ひます。

(渡辺敏彦委員) 議会中だから。

(石原洋三郎委員長) ええ。議会中ということでお願ひします。

(佐久間行夫委員) 先ほど何か委員長がまとめていただいたような感じだったのですけれども、そういうことではなかったの。ほぼ先ほどまとめしてもらったではない。

(石原洋三郎委員長) いえいえ、これは一応皆さんの意見を聞いて、こういう3つになるのではないかとということであるのですけれども……。

(佐久間行夫委員) 何か意見を聞く前にもうできていたような気がしたから。

(石原洋三郎委員長) いえ、そんなことはないのです。

(佐久間行夫委員) 違うの。みんなの意見をもう予想して、こういうことを言うてくるだろうということ……。

(石原洋三郎委員長) いやいや、皆様の意見をまたちょっと整理して……。

(佐久間行夫委員) まとまったような気がしない。何か……。

(石原洋三郎委員長) きょうは、暫定的なポイントだけを言った。

(後藤善次委員) 全部網羅されていなかったから。

(石原洋三郎委員長) そのほか皆様から何かございますでしょうか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(石原洋三郎委員長) なければ、以上で経済民生常任委員会を終了いたしますが、まだちょっと確認したいこととかありますので、閉会後もお待ちいただければと思います。終了いたします。

午前11時04分 散 会

経済民生常任委員長 石原 洋三郎